

ポスト鄧小平に向けて胎動  
熱烈歓迎！ 天皇訪中後の日中関係はこう変わる







▲人民大会堂前で儀仗兵を閲兵する天皇陛下。隣は楊尚昆国家主席 ▶万里の長城をご覧になる天皇・皇后陛下下 PHOTO 雑誌協会代表取材

「これがそうですか」

天皇・皇后陛下下は、10月26日、中国西安の陝西省博物館で、「平成」の元号のもととなった「地平天成」の文字が刻まれた石碑をご覧になり、感慨深げに顔を見合わせた。過去の日本の元号は伝統的に中国の古典から引用されている。これほどさように密接な関係にある「近くて遠い隣国」に、日本の天皇として初めて訪問したのだ。

今回の両陛下下の訪問は、中国各地で熱烈な歓迎を受けた。厳戒態勢が敷かれたため、一般国民が間近で接する機会は少なかったものの、北京市内の沿道に旗が飾られ子どもたちが花を持って迎えるなど、随所で温かい歓迎を受けた。中国側も、陛下が科学者であることを念頭に、接待責任者に科学者を任命するなど細かな気配りを見せた。お一人はこうした歓迎ムードの中、万里の長城の石畳の上を実際に歩かれるなど、6日間の大陸の旅を楽しまれた。

一方、注目された「お言葉」は、23日の歓迎晩餐会の席で、「我が国が中国国民に対し多大の苦難を与えた不幸な一時期がありました。これは私の深く悲しみとするところであります」と、語りかけるように述べられた。

陛下の率直なお気持ちが出ていたのは、という点で私はかなり評価しています。欧州あたりでは厳しい見方もあるようですが、「お言葉」そのものは日中間の問題です。それをどう受けとめるかは、

外交課題ですから政府・外務省が各国に理解を求めていくしかないでしょう（東京外語大・中嶋嶺雄教授）

この歴史的な天皇訪中で日中関係はとう変わってゆくのだろうか。中嶋教授が続ける。

「経済的には、中国市場が開かれれば放つておいても日本の企業は出ていくでしょう。ただ、中国側からの大型借款の求めなどには、無条件で応ずるべきではないでしょう。国際社会の中の日中関係なのだから、これ以上べたべたしたら、日本が世界で孤立することになります。」

日中関係そのものをとれば、今度の訪中で1つ目的が果たされたわけですから、今後、中国に対しては、今までのように「贖罪」という意味で遠慮せずに開かれた立場でいろいろ言つてゆくべきです。天安門事件に関しても、言つべきことは言うということです。

「鄧小平後」の中国は大きく変わるでしょう。この間の共産党大会でも市場経済のシステムを導入する形になっていますが、そうなれば、政治システムのほうも変わらざるをえない。それを今、鄧小平が締めつけているからいいが、それができなくなるとどうなるか。天安門事件が再現される可能性も十分あります。」

そうだった時、日本はどういう態度をとるのか。今回以上に世界の注目を集めることは必至だ。史上初めての天皇訪中で迎えた日中新時代。今、あらためて日本の外交姿勢が問われている。